

Title	日持上人の大陸渡航について(中) : 宣化出土遺物を中心として
Sub Title	Travels of Nichiji, a Japanese Buddhist priest in Kamakura period, to Yuan China (II)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.1 (1957. 7) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日持上人の大陸渡航について (中)

—宣化出土遺物を中心として—

前 嶋 信 次

五、立化祖師

宣化はいうまでもなく北京の西北方にあたり、察南盆地の中心を占める古い都會である。そのあたりは南に南口山脈を、北は陰山山脈をめぐらし、蒙古高地と華北平原の中間地帯をなしているから、萬里の長城もまたこの二山脈の上を走って二重になっていて、その内側に察南盆地と西方の大同盆地とをつんでいる。北京から大同に行く鐵路は居庸關の西北八達嶺あたりで第一の長城を起え、懷來、土木堡などを経て宣化に達するのであるが、それより更にやゝ西北の張家口はすでに第二の長城の走るところである。このような地形からも容易に察し得るごとくこゝは古來、漢民族と塞外諸民族、つまり農牧二民族の接觸地帯として歴史上に複雑な様相を示してきたところである。雑居と互市と戦争と、物資や文化の交流、諸民族の交錯と流血の悲劇との舞臺でもあった。日持がこゝに住んだのはやゝ平穩の時期であったが、その百年たらずの前には成吉思汗麾下の精兵が悍馬をつらね、文字通り屍山血河の慘劇をくりかえしつゝ金國の牙城を目ざして南下して行ったところであつた。秦・漢時代の上谷郡、晉代の幽州上谷郡に屬し、金代の宣德州（一時は宣化州）、元の宣德府、明の宣府、清の宣化府宣化縣などとしばしば名を變えている。(五九)

日持上人の大陸渡航について (中) (前嶋信次)

(一)

氣候風土もまた蒙古高原と華北平原との中間地帯にふさわしいもので、前者に比すればその氣候は溫和であるが、後者にくらべると寒暖の差がはげしい。陰山山脈の北は年間の雨量が二百ミリ前後、南口山脈以南は六百ミリ前後であるに對し、宣化では約三五〇ミリほどであるという。^(六〇)華北平原が耕種地帯、蒙古高地が遊牧地帯であるのに對し、宣化平原は半耕半牧、可耕可牧である。今でこそこの一帯の代表的都會としてはまず張家口の名があがるけれども、むかしは察南盆地をくぐるめて宣化府とか宣鎮と稱した如く、宣化が首邑であった。一口に察南盆地というが、實は宣化、桑乾、懷來の三盆地にわかれ、宣化も張家口もみな第一の宣化盆地の中心都會である。陳增敏の「宣化盆地」には宣化と張家口との消長をのべ「張家口がまだ重視されるに至らなかったころは、宣化が山後地方の邊境の重鎮、政治の中心で、張家口は萬全右衛として、常に宣化の管轄を受けていた。後に張家口の軍事地位が日に重要となり、蒙漢の商業も日に發達し、さらにロシア人がこの貿易に参加するに及んで張家口はいよいよ發達し、宣化の地位はようやく低下した。現在に至ってはすでに完全に張家口にとって代られた。」とし、更に宣化の城壁の高大さと完備さとは山後地方の諸都市の及ばぬ所で、現在の城址は、元時の宣德府城にあたり、明の洪武二十七年に始めて展築して今の城池の雛形となり、以後、たびたびの修理をへて、はじめて現在の形式となったもの、長さ凡そ二十四里、高さは三丈五尺に達し、厚さは約四丈五尺、全體として正四方形をなしているとのべている。^(六一)このあたりの氣候はすでに述べたように大陸的で「早穿皮袍午穿紗、懷抱火爐吃西瓜」(朝は皮ごとも、晝はうすぎぬ、火鉢をだいて西瓜くう)という諺があるという。^(六二)その西方城壁のきわまで黃砂があつくつもり、乾隆年間には城と同じ高さになったので知縣黃可潤がこれを取り去り、柳數萬株をうえて砂止めとしたというほどであるから、^(六三)かなり沙漠的氣候であることがわかる。冬はよく西北風が吹きまく

り、黄砂と肌をさくような寒氣とをもつて住民を苦しめる。これを黄風と呼ぶのであるが、近くの人の姿も見えぬほどで、ただこれ黄色の迷濛世界であり、山光河影を見ることもかなわぬといわれている。^(六四)

しかし灌漑さえ行きとどけば、地味はかなり肥えている。たとえば宣化の葡萄といえば遠くまでできこえ、北京で賣られるものうち、この地から来るものが多いとの事であるが、これは城内と北門外の城に近い所からのみ産し、城内でも清遠樓という鐘樓のあるところから北方でのみ栽培し得るといふ。^(六五) 紅白の二種があつて、白葡萄が最もよく、紅葡萄

中の老虎眼がこれにつぐ。昭和十七年にこゝの葡萄園を視察した京都大學名譽教授菊池秋雄氏の記録によると「城内にある葡萄園を見るに、何れも丈餘の嚴重なる牖壁に依て圍繞され、外部から葡萄の一枝一葉すら見ることが出来ぬ」といふ。^(六六) 乾隆宣化府志(三九)に金代の劉迎の詩をかかげてあるが、「葡萄秋」の一語がある。

日持上人よりも少しく前、世祖クビライの至元年間にマルコ・ポーロ(一二五四年生れだから、日持より四年若い)がこの町を訪れたらしく、次のように物語っている。

「スィンダチウ Sindaciu (宣德州) という都會があるが、ここでは多くの手工業が營まれている。とりわけ軍隊で必要とするあらゆる用具や馬具が製造されている。この州下の山中にイディフ Ydifu という場所があり、大層よい銀産地があつて多量の銀をとっている。この地方には野獸が多いため、あらゆる種類の狩猟や鷹狩が行われている」。^(六七)

そのころは、この町は右のように手工業が榮えていて、人氣もよかつたのではないかと推察される。康熙の宣化縣志(卷十五) 風俗志には、元初の高名の學者劉因(一二九三年歿)の言葉をひいて「宣德は習尙朴茂にして人は禮儀を尙ぶ」としている。なお劉因は一二四九年の生れであるから、日持より僅に一歳の長であつた。^(六八)

以上、日持上人が晩年を過したと思われる宣化（當時の宣德）の町の特徴を述べてきたが、次にその遺品が出たという立化寺についての記録を調べて見よう。

まず康熙五十年（一七一二）の宣化縣志（東洋文庫藏）卷十三には、「縣治内の各寺」の項で

立化寺 在塔兒街

としてある。冒頭に「すでに圯したるものは載せず」と断つてあるから、康熙年間にはさして荒廢していなかったと見てもよいかと思う。乾隆八年（一七四三）の宣化府志（東洋文庫藏）の卷頭の附圖には、城内の西南隅に塔と寺の形を書き「塔兒寺」と記している。塔兒街の名は多分この寺の名から生れたものと思われる。ただし、これは立化寺とは別の寺であるかもしれぬ。そして、その卷十三の「寺觀」のところに

立化寺 塔兒街

としてある。民國十一年（一九二二）刊行の宣化縣新志（東洋文庫藏）は知事陳繼曾等が編したものであるが、卷二、建置志に

立化寺 塔兒街

とし、更に卷十六、藝文志上に「重修立化寺碑記」を載せている。これは何人の撰文であるか、明記してはないが、この文の前に載せられた數篇がみな李彬という人の手になっているらしい所から見て、これもまた同一人の作かと推察される。ここにその全文を掲げることにする。

蓋聞莫爲之前雖善弗彰、莫爲之後雖盛弗傳。郡城西南隅建有立化寺一所。稽之遺銘凡立化祖師顛末一切備載。未便

重序。當時有崔公名寶者捨宅營刹。黃公名椿者施財建塔。繼之者本寺住持正祿・越後住持法雨、疊爲建殿塑神、增置園產、以圖永久。無奈延及至今、寺內無人、殿宇坍塌、神像剝落、誠不堪睹。其內園租・香火、歲得宣錢三十餘吊。惟有俗人看守而已。道光二十一年適有戒僧廣運字靜天者、參方至此。目覩荒涼、即發善舉、謀諸附近鄉老士民、咸樂觀成、守者願退。靜天因而獨捐己貲、不藉檀越一力建造。于道光二十二年督工興造、二十四年工程圓滿。至此殿宇煥然同新。神靈始得妥侑。夫以靜天幼懷貞敏、早悟三空、長契清神、先苞四忍、戒行檀栢、得蓮步於迦維、敷化邊疆、期同臻夫彼岸、乃坐禪多倫諾爾、修寺上谷郡城、向非祖師之至行感動焉能有此復興。向非靜天之樂善輕財焉能有此盛舉。余與靜天素相領契。請爲立銘以誌緣由。靜天未允。且曰非博虛名。余謂不然、儻莫爲之誌、興廢無稽、其何以勵後人。爰濡筆以書之、勒石以永之。後有繼者亦將有感於是舉。

右の大意は、すべていかに善いことであっても、まず始めに行うものがなければ、世に明らかになることは出来ぬが、さりとして、その志を後にうけるものがない限り、どのように一時は盛であっても永く傳わることには出来ぬと聞き及んでいる。宣化郡城の西南隅に立化寺という一字の寺院がある。これは立化祖師を祀ったものであるが、この人についての細かいことはその銘文が残っているから、ここに重ねて述べるまでもない。この寺の創建當時、崔寶というひとはおのれの邸宅を寄進して、こゝに寺院をいとなみ、黃椿というひとが私財を投じて塔を建てたのである。その後も正祿、法雨などという住職がかさねて殿堂を建て塑像をつくり、また所屬農園の収入を増したりして永久の計をはかってきた。いかんせん、それからひいて今に至ると、寺内に人なく、殿宇もくずれおち、祖師の神像もはげ落ちる有様で、まことに見るに堪えぬ哀れな有様となった。内園の年貢や參詣人のさゝげる賽錢などで、年に三十餘吊(一吊は一千錢)の

収入があるが、ただ俗人がこゝの番人となっているだけで住持もなくなってしまう。道光二十一年（一八四一年、わが天保十二年）に至り、たまたま廣運、字は靜天という僧が諸方を參拜してこの地に來たが、この寺の荒涼たる有様を目のあたりに見て、すなわち、よいくわだてを起し、附近の有力者たちに相談して見た。しかしみな他人の努力で仕事が出来上ったところを見て樂しみたい方であり、積極的に協力しようとはしなかった。寺を守っていた俗人もやめて去りたいということであった。こゝにおいて靜天はひとり私財をなげ出し、檀家の力は一切かりることなく建造にとりかゝった。起工したのが道光二十二年で、同二十四年になってやっと落成をつげた。こゝに至って殿宇はあたかも新築したと同じようなかがやかしさで、立化祖師の神靈もはじめてやすらぐことができたというわけである。さて僧靜天は幼時から志すところが殊勝で、はやく佛教の眞理をさとり、よくその戒律を守り、遠く異郷まで修業に赴き、邊境の地にその感化をひろめた。釋尊などと同じくかの彼岸に至ることを心に期するところから、ドロンノール（内蒙の地名で同名の湖水の近くにある。元代の上都開平府の遺趾は、今のドロン町の西北約三十六キロの地にあたっている）で坐禪し、上谷の郡城（宣化）でかく寺を修築したりしたのである。これというのも立化祖師の至行がこの人を感動させたゝめで、このことがなかったなら、どうして今回の復興を見たであろうか。さりとて靜天の善を樂しみ財を輕しとする徳行がなかったならば、どうしてかくの如き盛舉があり得たであろうか。兩々相まってこの結果を生んだのである。わたくしはかねて靜天とは深く相許す仲であるが、かれの了解をもとめ、銘文一篇を草して今回の復興の事情を記しておこうとした。しかし靜天は許してくれずに『そんな事をされると、自分が虚名を博することになるのではないか』と云うのである。わたくしは『そんなことはない。もし、これを記録しておかないと、この寺の興廢の事情がわからなくな

る。一體どうして後世の人を勵ましたらばよいのか』と云ってきかず、こゝに筆をしめして書きつけ、石に刻して永く傳える次第である。これから後に、この寺の永續の事業を繼ぐものが現われるならば、それはまさに靜天の今回の美舉に感動した結果にちがいない。」

右の文中に見られるように、ほかに立化祖師の事蹟をしるした銘文が、少くともこの碑の立てられたところにはあつたらしい。それは今もあるのか、それともその後において滅びてしまったのか残念ながら知ることが出来ない。またその銘文をのせた文献も見あたらぬ。ただ前文の終りに靜天という僧が、このような奇特な行爲に出たのも「祖師の至行に感動したゆゑである」という文句があること、および祖師の歿後も、次々にそのために寺塔を建てたり、これを復興したりするものが現われて數百年後まで續いたことなどから考えても、立化祖師が何か非凡な、また強い影響力のある人物であつたことは疑うべくもないのである。そしてその墓から右に述べたやうな遺品が二十餘點も出たといふのである。してみれば立化祖師とは實にわが日持上人のことに外ならぬとするのが當然であらう。

六、從來の諸説

しかし、こゝに問題となるのは、上人の大陸渡航の事情、及びかの地における行動についてすでにいろいろの説があることである。そのうち徳川時代末期までのものは、單なる噂説、傳説の域を出ぬものであるが、明治以降になると、實際に蒙古、シベリア、滿洲、北支地方に赴いて日持上人の遺跡をつきとめたといふものが現われてきた。それらの所説は概括していえば宣化の遺物の物語るところとは全然一致しない。そこで順序上、まず從來の諸説を一通り述べて、そ

の眞偽のほどを考えて見なくてはならない。

まず日潮の本化別頭^つ佛祖統記(卷十)の日持傳のあとに種々の噂話がまとめてある。この書はいうまでもなく享保十五(一七三五)年刊であるから、日持の門出の年から四百四十年後のものである。その大意は、

「むかし迦葉摩騰、竺法蘭らははるばるとインドから中國に來て佛法を傳えたが、これらは後漢の明帝の招聘に應じたものであった。日持尊者に至ってはこれとはことなり、大白法を懷に抱き、柔和忍辱の衣にその身をつゝみ、大慈悲心を發して、あえて異域の教化に赴いたものであるから、その勇氣において摩騰や法蘭をはるかに凌いでいる。或はかゝる企てが早計にすぎはしなかつたかと問うものもあるけれども、のち五百歳中に一閻浮提に聖法を廣宣流布せしめ、これを斷絶せしむることなかれとの佛讖に應じ、また高祖日蓮が末法の弘傳は日本を濫觴とし、眞丹(中國)月氏(印度)に及ばんと予言された意をうけて往かれたのであって、決して早計ではなかつた。小丈夫の心をもって大丈夫の識見を計ってはならぬ。その人はまた問うて『果して異域に流布したものであろうか』という。なるほど日本においても圓機の純熟した土地はまだその半ばにも至らぬのであるから、異域は到底日本に及ばず、流布も遅れている。このごろひそかに聞くに河北眞定府唐縣に法華社があり、法華村があり、蓮華寺があるとのことである。(原註。行唐縣志十二卷は康熙十九年に知縣王鶴の著わすところ、卷二・地理部に阜平西部を五社に分割し、その第二は法華社なりとし、その領村は五つあって、その内に法華村ありとしてある。卷五・寺院部には東郷連家庄に蓮華寺があり、元の至正年間に建つとある)また東國輿地勝覽を見ると、朝鮮國開城府に妙蓮寺があり、法華を以って寺を建つとある。(輿地勝覽卷五。その註に、三峴里にあつて、高麗の忠烈王が齊國大長公主とともに佛氏を尊信し、入佛の道は法華經こそ最もふかいと

し、勝地を卜して精舎を立てたものであり、至元二十年の秋に堂をかまえ、明年の夏に落成した。開山は師子庵の洪恕實である云々）更に長湍都護府にも蓮華院があり（卷十一。府の東二十三里にありとしてある）^(七〇)、靈山縣には法華寺があり（卷二十七。靈鷲山の絶壁上にあつて、わずかに石徑を通ず。人は攀縁して上下す）、珍原縣には蓮華寺があり（卷三十六。仙台山にあり）^(七三)、康津縣には法華院があり（卷三十七。莞島中にあり）、大靜縣には法華寺が（卷三十八。縣東四十五里に在り）、祥原郡にも同名の寺が（卷五十五。城山に在り）ある由が記されている。これらはけだし其名によつて其の實を憶うべきものである。日持尊者の吾國を出たのは中國の元初にあたる。すなわちその弘法は或は高麗に始まつて中國に及んだのであるかも知れない。また文祿年間に豊臣秀吉公が朝鮮を征したとき、來援した明軍の一將が南無妙法蓮華經七字の旗をおしたてていたことが清正紀事に見えているが、これも一案となすべきである。あゝ、いつの日か官命にかりて異域に赴き、その實否を確かめたいもの、これこそわが願ひである。」

これはただ法華村、蓮華寺、妙蓮寺、蓮花院などという土地や寺院が河北の行唐縣や朝鮮の南北各地にあるというだけのことで、このような名前は格別日蓮宗に限られたわけではないから、その名稱だけではもちろん日持上人との關係の有無を知るよすがとはなり得えない。日潮上人もまたこのような地名や寺名のあることに興味を感じ、漠然と日持との關係を想像しただけのことであつて、格別にこれをもってその布教の實證であると主張したわけではないのである。その他、徳川光圀や新井白石も日持の事蹟に興味をもち、朝鮮方面になにか残っていないかと考えていたらしいということも附記してよからう。白石のごとき朝鮮の使節にそのことを訊ねて見たとのことである。

明治時代に入ると、その研究もよほど具體化してきた。中里右吉郎氏の記録によると、

日持上人の大陸渡航について（中）（前嶋信次）

（九）

「明治年間、日持上人の大陸踏破事蹟を調査した人に岡本柳之助氏があるが、既に故人となった。岡本氏は朝鮮、支那に大志を抱きしばしば大陸を遊歴した。同氏は其著書『北海道史稿』中に、日持上人の傳を記し、上人の英雄僧たることを崇拜してゐる。私は明治二十七八年の日清戦争前、彼の金玉均事件にて岡本氏と面談し、又戦争後も再三面談したが、同氏は日持上人が北海から靺鞨、即ち今の沿海州に渡り夫より北高麗に入り間島を経て支那大陸を踏破されたと主張してゐた。尙ほ同氏は、日持傳中に、行唐縣志を引例し上人の入元を證してゐるが、しかし行唐縣志のみでは果して日持が入元したのか漠然としてゐる。唯だ『靺鞨から北高麗に入り大陸に渡ったと云ふ主張』が、正確なものであつた事が後にわかつた。要するに岡本氏は上人の事蹟研究に功勞のあつた人である。」

とある。^(七六)行唐縣志のことは日潮上人の仏祖統記からとつたものであろう。行唐縣志の記事はその薄弱な根據にもかゝらず、これから後、日持の大陸における事蹟を研究する人々の出發點のようになってしまった。北海道志稿は昨夏、松前の史家松本隆氏^(七七)を訪れたとき、その書架にあつたものを一覽したが、恐らくこれが明治になって最初に日持の大陸における事蹟を考えたものかと思われる。

大正十四年八月二十日から九月十六日にかけて高鍋日統僧正（昭和十七年頃福岡縣築紫郡水城院院主）は日刊新聞「日本」に「六百年前蒙古に進入の英雄僧日持上人論」を連載した由である。原文は見るを得ないが、その概要は、同じ人の「聖雄日持と豊太閤」（昭和十七年十二月、東京大日本建國史學會再版、静岡蓮永寺藏）に再録されている。それによると高鍋僧正は二十何歳かるとき、日持の足蹟を辿つて北海道稚内方面までをさぐり、その北海道教化のことは考古學的にも、文献的にも一點の疑問もないことを信じ、「日持上人遺蹟探求會」をつくり、第二番の探求旅行者と

して明治四十五年に柿花啓正氏を北海道に送った。その結果として柿花氏の「日持上人の御遺跡探求記」という一書が出来た。柿花氏の結論は「日持上人は北海道のみでとどまり、大陸には入らず」という事であった^(七八)。しかし高鍋氏はその後、奉天、錦州、山海關、天津、北京、更に北樺太、アレクサンドロウスク、デルビンスコエ、ルイコフ、またハルビン方面まで巡錫した。そして日持上人は「たしかに大元に入り、蒙古に進み、アルタイ山下に黄金國を建設し、もって大日本建國の理想と、法華大乘寂光國土の靈肉統一第三帝國の實現の雄圖を垂れ給へり」という中里機庵の研究を信ずるようになったという。柿花啓正氏にはまた「神州の精華日持聖人海外遺蹟探險記」(大正八年東京二松堂刊)という著もあり、それによると大陸渡航を實現したという意見であり「永仁三年六月一日北海に航し、石崎にアイヌを教化すること前後四箇年後、後伏見帝正安元年(一二九九)六月一日に石崎を發し、順路東海岸を経て渡唐法華村^{トドホツケ}に達し、夫から海外に航した。すなわち北海道の渡島、膽振、日高等を巡化せられて、北見の宗谷岬あたりへ御出になり、進んで樺太、滿洲等へ宣傳せられた」とのべてある^(七九)。渡唐法華(楸法華)という所は函館から海岸にそって東にすすみ惠山岬を北にめぐったところにある。現在も北海道の各地で行われている傳説や記録によればかの地にて弘教すること約五年にして、こゝから東海岸傳いに宗谷岬の方面に向い、樺太を經、黒龍江口のニコライエフスクあたりに上陸したというのである。

渡邊茂氏編著「北海道傳説集―和人編―」(昭和三十一年、札幌出版)によれば「妙應寺由來」と題して深瀬春一氏著和人傳説考をひき「龜田の石崎に日持山妙應寺というのがある。永仁三年日蓮の弟子日持上人の開山と言われる。昔永仁の頃日持上人は宗祖日蓮の十三回忌の法要を修して、諸國弘教の行脚の旅に出た。そうして奥州津輕から漁夫甚平

を案内に渡島、布教の傍ら農事や植樹などを奨励し、後には甚平一族も悉く移住させ、その徳望は近隣に聞えて集り來る者が多く、たちまち一部落が出来る有様であった。上人はこゝに約五年ばかり留錫してよいよこの地を出發するにあたって、本國から隨身し奉った自作の宗祖の尊像と、こゝで刻んだ十二體の佛像と、また一石一字の經文を書いた經石をこの地に埋め、大石をその上に据えて後生の二字を記された。これが後生塚とか經石庵と呼ばれた所以であった。
(下略)^(八〇)とある。

筆者もまた昭和三十一年八月下旬この寺を訪れた。函館から海岸ぞいに三里あまり、バスで約一時間のところにある。右の文にある數體の木像や一石一字の經文を拜觀し、同寺の先代の住職松野顯佑(北鯤)上人が明治四十年に書いた「六百年前海外遠征の偉人日持大上人」と題する記録を一覽することが出來た。それによると永仁三年六月一日、津輕石崎の漁夫甚兵衛の舟で、今の函館の地なるウススキ島に渡り、山上の大石に題目を残し(函館實行寺の裏山に今もそれと云い傳えるものが残っている)、それより今の錢龜澤村港に渡り、庵を結んで留錫すること前後五年に及んだ。庵のあった附近を石崎というのは、甚兵衛が一族を率いて移住し、津輕の石崎の名をこゝにもつけたゆめという。今の妙應寺はもと經石庵といふ、渡島國龜田郡錢龜澤村大字石崎村字白石にある。

「北海道傳説集」には次に「^{トホ}概法華村と^{ホツク}鯰」という項の下で次の如くに記してある。

「龜田郡概法華村に傳わる^{ホツク}鯰にまつわる傳説が、いまでも古老などに語られている。それはいまから約六百年も前の昔のことである。日蓮上人の弟子に日持という傑僧があった。どうしたわけか上役人の迫害を受け、遂に島流しの刑に處されてしまった。しかし船は幸運にもある日のこと、いまの^{ニサン}惠山岬のある寂しい漁村に漂い着き、親切な漁師に助け

られた。こゝに草庵を結んだ上人は、毎日熱心に佛の教えを説いて布教に努められたが、永仁七年の六月朔日に唐渡を發心してこの地を去る時、いままで大變世話になったが何もすることが出来ないから、魚を澤山獲れるようにすると言ひ残し、別れを惜んで酋長のムシヤタを案内に、唐土を指して惠山の北濱から船出したのであった。その後この濱で名前を知らない魚が澤山獲れた。漁師達は非常に喜び、これこそ上人様の置土産に違いないと、ホッケと名づけると共に、またこの部落を唐渡法華と稱し、日持上人の徳をたゞえ豊漁に榮えたが、後いまの蝦法華と改めたという。〔深瀬春一著・和人傳説考〕

アイヌ語ではトローポケ（岬陰、または岬下の義）といわれ、この傳説はこれらアイヌ語から轉訛して附會されたものとも言われる。〔永田方正著・蝦夷語地名解〕^(八一)

なほ同書には函館實行寺裏山の夜鳴石の傳説をしるしている。

「今からおよそ六百年ばかり前の永仁年間のことであった。日蓮上人の高弟である日持上人が、法華經を蝦夷地に弘道するためはるばる函館に渡り、毎日佛の教えを説きながら方々廻っているうちに、ある日のこと函館山を巡錫されて鶏冠峯の麓の宿に泊られた。ところがその深夜、遠くどこからか人の泣き聲がするので、不審に思つて宿の主人にたずねると、實はいまから少し前のこと、どこか武士か知らぬがあ山の山の大石の前で、赤子を負うた女を殺し屍體をそこに埋めた。それからあゝして毎夜泣聲が聞えて來るのだとの答へであった。上人はその話をしばらく黙然として聞いておられたが、翌朝早速山に登つてその大石の前でお經を上げ、なほ石面に七字の御題目を書かれた。それ以來泣き聲もやんだという。

その後文化の頃京都本満寺の住職日龜上人がこゝに來られ、經文の消滅することを恐れ、わざわざ石工を頼んで刻ませたものである。〔深瀬春一著・和人傳説考〕^(八二)

この石はもと一乗山實行寺の裏の御殿山の頂上から少し下方にあったが、明治三十年代にそこが要塞地帯に入ったため、今は寺のすぐ裏山に移されている。同寺の境内にはまた日持上人の銅像もたっている。

傳説集には更に「袈裟栗の由來」と題し「龜田郡七飯村字水無というところに、袈裟栗と呼ばれる樹高四十五尺、目通周圍五尺もあり、樹齡凡そ五百年と言われる老樹が亭々として立っている。

そのいわれは、いまから約五、六百年の昔、日蓮上人の高弟日持上人が、はるばる蝦夷が島に渡り、石崎からこの地を布教の折、この樹に袈裟を掛け、經を唱えたのでこの名が出たと傳え、いまなお里人達は御神木と稱して犯すものなく、崇めている。〔北海道の名木美林〕とのべている。^(八三)

一字一石の經文というので思い起すのは日蓮が許されて佐渡から歸り、文永十一年、日興・日向・日頂・日持・日進その他を從えて甲州に入ったとき、石和^{イサワ}で一字一石の御經を書いて笛吹川に投げしずめ、非業の死をとげた鵜飼の老人の靈をなぐさめたという傳説であり、木に袈裟をかけたという故事は、同じく甲州八代の里で、梅の木に袈裟をかけてふた子を生んで死んだ婦人の亡靈を鎮めたという二子塚の傳説によく似ている。^(八四)その他、なお江差と松前とに法華寺があつて、それぞれ日持上人を開基とする名刹ではあるが、文書も遺物もこれといったものはなく、上人とどのような關係があるかわからなくなっている。江差の法華寺はもと上の國村にあつたもので、そこからも一字一石の經文が出たとの所傳があるが、現在は何にも傳わっていないらしい。^(八五)

しかし、かの地の人士の上人を慕う情は今も強く、六月一日の祭典には、石崎のような寒村でも参詣者がひきもぎらぬとのことである。青森縣黒石市郊外の笠松峠（法峠）の上にも日持が題目をしるして去ったという石が残っている。その麓の法嶺院には上人の木像が祀つてあるが、これまた土地の人からなみなみならぬ尊崇をうけている。要するに感化力の強い、人心を魅する徳をそなえた人物だったのであろう。それでなくては、ただひよう然と通りすぎて行つた旅の僧を數百年の後に、かくまでも慕いなつかしむということはあり得ぬことと思われる。これが弘法とか日蓮・法然・親鸞などの如く一宗の祖として功なり名とげてこの國に大往生をとげた人々ならば、そのゆかりの地やゆかりありと附會された所にまで様々の傳説の残るのはことわりであるが、日持の如く、いわば雲海のかなたに行方不明となつてしまつたひとは、普通ならば忘れ去られるのが自然と思われる。しかし事實はその反對である。筆者もまた各地にその遺蹟をたずね求め、人々の心に上人が今も鮮かな印象を残していることを知つて驚くほかなかつた。

影山上人の研究では、津輕の笠松峠から合浦外ヶ濱に至り、漁夫浦野三郎助のもとに數カ月滞在し、永仁四年春、石崎の蠣崎甚兵衛の船で、今の渡島の石崎に渡られ、前後四年間土人の教化につとめた後、正安元年（一二九九）その五十歳のとき、楳法華から丸木舟で大海に浮び大陸を志したとしてい^{（八五）}る。果してい^{（八五）}ずこの津から、何年に大陸に渡られたかは後文で卑見を述べることとする。

七、黒龍江口上陸説

高鍋上人の書によると、日持上人の大陸上陸の地點は黒龍河口に近い、ニコライエフスクであろうという。そのこと

は大正二年八月二日附で同地の日本領事館がサガレン布教中の花木即忠師に與えた證明書に徴して明白であるとのこと、高鍋師は奉天で花木師からその文書を示されたといっている。大要は大正二年七月十四日、日持上人の遺跡調査のため尼港に着いた花木師は、その月廿一日、黒龍江口邊を調査中、外ボロンゲ第二十九號にて函館三洋組罐詰部主任中里壽郎氏に遭遇しいろいろと相語った。中里氏のいわく「かつて三十號漁場を經營していたころ、岬角で一基の古碑を發見したが裏面に「日持」とあったので、日本人の碑であろうと思つて香華をたむけて祭つた」と。そこで花木師は翌早朝、中里氏とともにその地に赴いたところ、その岬頭は三年前露人ライチンの手によって工事を加えられ、前年の面影もなかった。數日後、ライチンの承諾を得て發掘探査に従い、極力手を盡したが遂に何等得るところがなかった。そこで花木師は、一切の顛末を記し自身の行動がこの記録と相違ないことを證明してもらつたといふのである。また中里氏の書いた證明書というものもあつて、その中に「岬頭數尺の雜草を拂ふに一基の古碑あり。表面毀損して文字は分つ能はず。裏面漸く日持と判讀せらる。衆人曰く日の字あれば日本人の碑たらんと。此れを附近の土人に糾すに曰く古來日本人の碑たりと云ひ傳ふ云々」とあるといふ。

また高鍋氏は樺太旅行のとき、眞岡の眞宗寺で次のような話を聞いた。「かつて北海道江差の漁夫がやはり尼港の同じ地點で「ヒモチ」(日持)としるした碑を見た(八七)と語つた」と。

次に男爵石本惠吉氏が滿洲の間島地方琿春に勤務していたころ書いたらしい「六百年前滿蒙に進出せる日持上人海外布教の経路」と題する一文がある。(八七)これは主として樺太から遼陽附近に至る日持上人の行程を推察したものであるが、まず樺太では「眞岡をすぎ、本斗の北方約二里の阿幸附近に至つたごとくである」としている。ひとまず眞岡まで北上

してから海岸ぞいに阿幸附近まで南下したというのはどのやうな根據からいえるのであろうか？ 「これから氷を踏んで亜細亞大陸に渡った。つまり韃靼海峽をへ、ニコライエフスクの南岬ブロンゲ岩頭に着陸した」という。氷上をどうして尼港などまで北上したのか、その理由や方法などは示していない。「これから海路か陸路かわからぬ。海路ならばポシェット灣附近が最も（上陸地として）可能性がある。それから琿春（當時の建州左衛）に出て、長白山の南路か北路をとり遼陽附近に出たであろう。……ニコライエフスクから陸路をとったとすれば黒龍江をハバロフスク邊までさかのぼり、西して松花江に入り、依蘭（三姓）から牡丹江によって南行し、寧古塔につく。鏡泊湖の西を通過して額穆に至り、吉林をへて遼陽に出たのかも知れぬ。ハバロフスクからイマン、ニコリスク（雙城子）を経る通路もあるが、どちらにしても寧古塔を通る」（以上原文の大意）そして石本氏は、以上の諸路のうち黒龍江―松花江―牡丹江という経路がもっとも可能性があつて「實にこれがわが日持上人の通られた道と斷定して然るべしとの信念に達した」と述べている。またその旅は舟か、寒期ならば犬橇であつたとし、すでに韃靼海峽を嚴冬のときに渡られたのであるから「大黒龍江の氷上を四・五頭屈強の犬に曳かせた橇に乗って題目を高らかに唱えながら疾驅せられたと思ふ。六百年前のこの御雄姿は想像するだに感激に耐えないではないか」「寧古塔は古來から東北滿洲の政治交通の重要地點であつたため、日持上人も必ずや數日か數十日をこゝで過されたと思ふ」とも云っている。そして終りに近いところで遼陽附近から北京方面への道は元代であるから、もちろん熱河を通られたもの……ともしている。^(八八)

八、中里機庵の説

以上の如くすでに先人によって北海道から華北までの日持上人の通過路が考えられているが、みな想像假定の説である。ニコライエフスク附近の岬角の古碑というものも、これだけでは日持上人の遺跡と断定することは出来ない。興味ある逸話の程度にすぎぬものである。筆者をして遠慮なく云わしむれば、渡島の石崎までを確實な足蹟としてよいかと思ふのであるが、それから先はなんらはっきりしたことはつかめていないのである。ところが、こゝに機庵中里右吉郎氏によって「蓮華阿闍梨日持上人大陸踏破事蹟」という一書が著わされ、八十頁あまりを費し微に入り細にわたって大陸渡航後の事蹟を述べていることに注意しなければならぬ。卷頭にある静岡蓮永寺の住職丹澤日京上人の緒言がよくこの書の成立事情を説明している。曰く、

「我開山蓮華阿闍梨日持上人の海外弘通の事蹟に關し多年研究注意を怠らざりしが、從來其遺跡の存在する範圍は北海道樺太靺鞨方面に限らる。支那中部及び蒙古地方にも必ず巡錫教化せられしは想像に難からざるも其史蹟に至りては漠として知る可からず。野衲之を憾むや久矣。偶ま機庵中里右吉郎君曾て滿蒙を踏破し上人の史蹟を調査して本稿を著はす。記する處悉く前人未説の新事實なり。記實若し誤謬なしとせば我日本佛教史上の一大發見といふべし。雖然關はる所甚だ大なり。須らく慎重に檢尋考査して事實の正確を期せざる可からず。幸哉稿者中里氏本稿發表に關する一切を擧げて今回特に當山に委屬せらる。乃茲に活字を以て謄寫に換え先づ内外有識者の机邊に贈呈す。希くは精覽高批あらんことを。印刷に付するに際し略して事由を添記すると云爾。大正十五年五月。」

寡聞にして、その後、この書についてくわしい研究批判を加えたものあることを聞かない。また私は幸にしてこの書を蓮永寺において借覽し得たのであるが、流布の少いものゝように思うので、そのきわめて概要を次に紹介しつつ、その間に少しく卑見を加えて見たいと思う。「」内は原文通りの引用ではなく、その要約である。

「明治三十二、三年ころ、義和團の騒乱の後、山西省から北京にもどる途中、井陘關に二、三泊した。ふと岡本氏の北海道史稿に眞定（正定）府行唐縣に日持の遺跡があるとのくだりを想い出し、行唐縣に赴いた。調査した結果、楊家庄に蓮華寺という佛寺があることがわかった。それは行唐縣城から西南へ五支里の小村にあり、寺とはいえ朽ちかゝった庵室で、道士が四、五人住んでいた。それに寺の由來をたずねると大元の時高麗の僧妙持なるものが來て開基した。妙持は妙法宗の僧であると傳えるが別に記録はないと答えた。明僧龍潭の紀行文に『日持は高麗僧ともいう』とあるによつてもわかる如く、日持上人は入元の途次、日本人と稱せば危険も起らんとて便宜上、高麗僧妙持と唱えたことがある。よつてこの蓮華寺と日持上人とは必ず關係があるに相違ない。『上人が行唐縣で法華妙法を流布したことは十分推知が出來た』」

「次にその北方の阜平縣を調査したところ、法華村、法華社と稱する特別の村落はなかったが、法華講という結社があることがわかった。これは無盡的相互救濟の機關であつた。その集會には主座の老爺が「南無妙兒ナンマイニヤンル」と發聲し、一同これに和して叫ぶを例とする。『私は日持上人教化の餘音が媚々として今日も残っているものと信ずる』」

「正定府の龍興寺を訪れた。住持のいわく、元朝時代の住職光覺は、龍興寺中興の大師と仰がれた人で、天寧閣に隣して法華堂を建立したが、後に火災で燒失した。この光覺大師のとき日持上人が來遊したのかも知れぬと。更に臨濟寺・

崇恩寺を訪れたところ、高麗僧が來たことだけはわかったが日持の事に及ぶと不明であった。たまたま府衙門に吳という日本に留學した者がいて、龍興寺の天寧閣にはもと『中國東瀛慧舟相通』の大額がかかっていた。筆者は蓮華頭陀という僧で元代の額として珍重されていたと語った。よって再び龍興寺に赴き、天寧閣を精査した。とある室に寫本・古書が或は積まれ、或は散亂していた。その中からふと王鶴の『天寧閣記』という寫本をひろい出し、見るとこれは彼が行唐縣志を出した翌年の康熙二十年に書いたものであった。その中には光覺と日持との關係がしるしてあった。こゝで中里氏は、その箇條を引用し原文と稱するものと譯文とをかゝげている。かなり長文なので、そのうちの一部のみを再録しよう。『光覺師は龍興寺中興の大徳、常に十方の英僧を招く。……たまたま東僧日持、長城をこえて興平府(河北省の東北部)に來り、法華經を説き、香名はるかに聞こゆ。……(光覺)書を飛ばして眞定に來遊をすむ。しかして日持も師の大徳を望み……欣然として錫を擁して來る。……それ日持は東瀛妙法日蓮法華宗の長老にして……海陸三千里、瀋陽を過ぎ渝關をこえ、はるかに中國に來りしは、その志もとこれ、大いに一天四海皆歸妙法の宗旨を行わんと欲するなり。光覺師深くかれの大行を讚歎し、宗門の異同を問わず、留めて説法せしむ。日持、淹留すること數日、師かれの志を納れ、獅座を天寧閣に移し、もつて法華經壇を設けしむ。……三定(眞定、保定、定州)の老宿、なお日持の説法を聞き、教壇に集るもの、項背相望み、悉く妙法の眞に服す。元の仁宗皇帝(在位一三一―一三二〇)は天性仁慈恭儉にして、人材を登庸し、賢能を擢用す。かつ大に儒佛の教を興し、世もつて泰元の盛時と稱す。……けだし仁宗帝の時、堯舜の治を擴ぐといえども、番教淫佛宮中にはびこり、奸人蒙奸その間に雜わり、宮闈みだれ、綱紀やぶる。帝これを憂う。番教はけだし喇嘛なり。……故に帝は孜孜として聖僧を得んことをねがう。……かつて龍興寺の大徳光覺師を招く。師

は老齡をもつて固辭す。しかして日持の聲名ようやく三定に普及す。ついにもつて燕京に聞こえ、帝の聰明に達す。帝よろこんで曰く、『眞乗の佛出ず』と。すなわち眞定府尹に命じ、師と日持とを招かしむ。光覺師動かず。日持もまたあえて京にすゝまず。帝焦慮し、侍臣曹哥をして、親しく龍興寺に詣らしめて優詔を賜う。師こゝにおいてか起つ。しかして日持を促してともに京にすゝむ。師、月餘にして京を離れて山に歸る。しかして日持は仁宗帝の師となり、法華の妙法を説き、もつて番教の弊を矯む。いまだその教革を審かにせずと雖も、ただ日持は東方浮圖の身にして妙法を元宮に説く、また偉なりというべし。』

この文中にはかなりおかしな所がある。眞定路を眞定府といふ、「大都」と呼ぶのが普通なのに燕京というなどその一例であるが、清朝の王鶴の撰文だそうであるから、それらは問わぬとして、そんなにラマ教をきらつた仁宗が元史(卷二四)によれば即位の年(一一三一)七月辛亥「西僧藏文班八をもつて國師となし、玉印を賜う」とあるし、翌皇慶元年二月には「使を遣わし西僧に金五千兩、銀二萬五千兩、幣帛三萬九千九百匹を賜う」ともある。同二年二月には「西僧擲思吉斡節兒に鈔萬錠を賜う」とあり、同じ年九月「相兒加思巴を以つて帝師となす」とある。これもその名から見るも西藏のラマ僧であろう。同じく元史(卷二五)に、仁宗の延祐二年(一一三一)二月に「庚子、詔して公哥羅古羅思監藏班藏卜を帝師となし、玉印を賜い、仍ち天下に詔す」とあるのも同様である。元史(卷二六)延祐四年の條には、「正月己未、帝師の寺に廩食鈔萬錠を給す」とあり、同五年十月には「壬辰、帝師巴思八の殿を大興教寺に建て、鈔萬錠を給す」とある。同六年三月には「壬午、大興教寺の僧に齋食・鈔二萬錠を賜う」とあるが、その翌年の正月丁亥の日に、帝は三十六歳で光天宮で崩じた。皇太子(英宗)が即位し、その年四月「西僧牙八的里をもつて元水延教三藏法

師となし金印を授く」(元史卷二七)とある。

世祖の時、八思巴を國師として以來、ラマの高僧が次々にこれに任ぜられ、仁宗一代の間もその勢力は牢固としてゆるいでいない。もっとも中里氏もその事實を否定しているわけではないが、仁宗がラマ教を淫教として嫌ったとか、遠來の日持をその師としたなどということは當時の事情から考えて到底あり得ぬことゝしなければならぬ。もっとも後文で中里氏は元朝宮廷の祕録「宮記」というものを引用してその證據としているが、そのような祕録はいまだかつて學界に知られたことはなく、天下に中里氏ひとりこれを知るといふ性質のものである。王鶴の「天寧閣記」といふ書も果してあったのであらうか。假に百歩を譲って存在したとするも王鶴は清初の人であるから、どうして彼ひとりそのような元朝の不思議なことを知っていたのか。王鶴その人の書いた所が怪しくなる。眞に書いたとしたら、これもまた重んずるに足らぬ雜文と見なければならぬ。

ではこの「天寧閣記」はどうなつたであらうか。中里氏の説明によると、この寫本をかうべく寺僧と交渉したところ、大枚千元を要求された。やつと五百元までに値切つたけれども、所持金が足らず、辛うじて銀三十枚をあたえて、日持上人に關する部分のみを寫しとつた。中華民國になつてから天寧閣の寶物は再三紛失し、四、五年前(大正十五年頃を規準として)正定に赴いて再調査したが、「此貴重な寫本も何處かに散失」していたとある。(八九)

中里氏の曰く「天寧閣記中の上人の一件發見から、それから夫と材料を發見し得た。上人が今の北海道を経て靺鞨に渡り、夫より更に北高麗に入り入元した道程は、明治二十七、八年即ち日清戰爭前(原文のまゝ)白頭山麓に於て、

日持從茲、征瀋陽路。

の碑石を發見したことにより明瞭になつた。北朝鮮の咸北道に於て、同二十七、八年前、妙法碑を發見したことも之を證とするものである。『北海道史稿』中に、日持上人の傳を記した岡本柳之助氏、及び同志士の滿韓に出入したものは、孰れも是等の碑石を目撃したのである^(九〇)と。なるほど津輕の法峠における如く路傍の岩に七字の題目を墨書してすぎる位のことにはまれにあつたかもしれないが、日持上人が異境において自分の行く手を石に刻して立てゝ行くなどゝいうことは考え得られない。もしかりに何かを書き残して行くとするれば、それは決してそのような道しるべ式のものではなくて、七字の題目であつたらう。妙法碑とは何であろう。かりに妙法と刻した碑があつたとして、それがどうして日持上人と關係があるのであるのか。次に中里氏は上人は咸鏡北道から間島に入り瀋陽（奉天）に入つたとし、こゝで露國の「グリンコ博士なる人」の説をひき「佛教が始めて滿洲に入つたのは、元の時代であつて日本僧が北高麗を経て入滿し布教したのである」と斷じていると云つて^(九一)いる。グリンコ博士とは如何なる人か、淺學にして全く知らないがスカチコフの支那書目 (P. E. Skachkov: Bibliographiya Kitaya, 1730—1930, Moskva 1932) にも見えていない。かりにそのような説を出したとするとこのグリンコ博士は渤海國をはじめ滿洲の佛教史を全く知らない人で、天下の奇説といわざるを得ない。中里氏はよつて「元時代入滿した日本僧は上人のみであるから、上人は瀋陽路に於て法華大乘の教を流布し始めて佛教の種を播いたのである」と述べているが、このように滿洲に佛教が入つたのを日持のときを以て始めとするというやうな奇説はもちろん取上げるべきではない。次に同じくグリンコ博士の「清朝は、漢族が佛教徒であつて、佛教の盛となるにつれておのれに反抗することを恐れ、佛教を敵視した」という不思議な説をあげ、これが遼陽に明時代まであつたという蓮華寺や日持山法華寺がとりつづされた理由であらうという考をも^(九二)のべている。もっとも

そのやうな寺がかの地にあつたというのは中里氏も「そういう説もある」というだけで、他にこれという根據のあるわけではない。

「上人の滿洲に於ける事蹟が清朝の佛教壓迫策にて湮滅したに反し、錦州の醫巫閭山、新民府では多少事蹟が遺つていた」とある。^(九三)清朝が佛教を壓迫したという説がすでにおかしいが、錦州も新民府もちろん滿洲のうちである。「新民府彰武縣には、妙法碑もあつたが近來何者か之をとりはらつた」「醫巫閭山の佛寺中には南無妙法蓮華經の法幡を寶物とし、年一回開帳するものがあり、清朝はじめには廣寧山日持寺（或は云う妙持寺）もあつたが、火災にかゝつて今はない」「天橋廠には日輪堂、法華庵があつた。傳説では日本の妙法船が漂着し、遼東の土民南無妙法蓮華經を高唱してこれを救つたようである。しかし六百餘年の星霜を経て、これら紀念物は湮滅している。しかし傳説は上人の錦州で説法されたことを肯定している」

「上人が山海關で萬里の長城を越えた證據は石門寨の側に日持妙法堂と南無妙法蓮華經の碑石のあつたことである。妙法堂は長城と同じ煉瓦様の土壁で建てあり、明治三十二、三年の義和團事變後、私は石門寨を巡覽し、はからずもこの堂を拜した。土壁は大半崩れていたが、日持妙法堂と刻した石は完全していた。石門子の題目の碑石も、半ば土中に埋まっていたが存在していた。……しかるに第二次奉天戰（大正十四年）に奉天軍がその種々の建物をとりはらい、直隸軍が石門寨に砲彈を浴せ、惜むべし『日持堂』も『南無妙法蓮華經』の碑石も、彈丸爆發のために形跡もなく破壊してしまつた。^(九四)」

これもまた遺文あれば必ず散じ、遺跡あれば必ず滅ぶの例にもれなかつたのである。「元代の榆關（渝關の誤。山海

關の古名) 誌には『石關即ち石門塞に妙法堂あり、僧日持建之』とある由である。この書は帝室御文庫の中にあると聞き及んでいるが、北京大學にも其寫本があるはずである。……しかし私が讀んだのではない。^(九五)

元代の渝關誌とは誠に珍らしいが、このやうな書の存否をまだ知らないし、中里氏も傳聞をしるしたにとどまる。さて日持上人は同氏の研究によると長城を越えて興平(永平)に到着した。「種々の調査により上人が興平に三年以上も留錫されたことがわかった。事蹟として今遺っているのは府城の西、蓮華庵一つであろう。もっとも他に有るかも知れぬが、こゝは三、四年前の大洪水で低地の寺院が悉く流れたので有力の紀念を喪うたようである」「この蓮華庵は以前は青龍山妙法蓮華寺と稱した堂々たる寺であったが、今はみすぼらしい草庵となつてしまった。本尊は『妙法佛』である。……ただ庵が上人の事蹟として認むべきは、今の永平府の記録に明かに記せられてある」ともあるが^(九六)『今の永平府の記録』というのでは漠然として何とも言いようがない。府志とか縣志とかはつきりした資料を示してくれない限り否定も出来ないかわりに信用もおき得ないのである。

「永平から正定(眞定)に入った。その證據は前述の天寧閣記と平山縣抱犢山の山寺にある『妙法穀雨』の大額である」という。これは日持と光覺がこの山に登り雨を祈つて大旱魃をすくつた紀念の額だといふのであるが、この所傳のよりどころを中里氏は示していない。かつまたこの額もすでに他に賣られたらしいといふ。^(九七)しかし『妙法穀雨』の額だけならば、日持上人が關係していなくともよいであろう。妙法という言葉は必ずしも日蓮宗の獨占ではないし、もともとが中國の言葉なのであるから、そのような額は他の人も書く可能性がある。行方不明にならず現存するとするもこれをもって日持が行つた證據とはなり得ぬであろうから、そう氣にする必要はあるまい。

次に中里氏は定州の曲陽で明代の僧龍潭の「井陘關紀行」という寫本を閲讀したという。「明のいつころともしらず僧龍潭は北京から井陘關に旅した。まさに曲陽（行唐の東北）をすぎ定河を渡ろうとしたとき。前方に丘陵を望んだので、そこに登って風光を楽しんだ。ふと朽敗した一つの寺と一つの庵を見た。附近に梨を賣る老人夫婦の草亭があったので立寄り尋ねると、老人のいわく『この寺は日蓮寺と申し、庵を日持庵と呼ぶ。大元るとき、東方から旅僧が見えて曲陽に、法華妙法を説き信徒も定州一帯に及ぶ。そこで信徒相はかり、寺と庵を建つ。僧の名は日持、しかし日本の僧とも高麗の僧ともいふ、能くわからぬ。今も曲陽の父老は聖僧の住みし跡と敬って、この寺と庵を拜す』と語った」というのである。^(九八)ただし「この寫本は北京大學にもある筈であるから、大學で紛失せぬ限りは現在も保存してある」と断つているが、^(九九)そののち中國も度々の兵亂を経たのできつと紛失したことであろう。

「曲陽の西北の恒山の上にも妙法堂があった。明治十二、三年ころ、日本に來た清朝の赴東使何如璋は、この堂を見て、これは日本日蓮宗の雄僧日持上人が大陸を巡錫した記念だと云ったとのことである。」ただし中里氏は直接何如璋から聞いたのでなく、曲陽の某紳士から傳聞した。ただしこの堂は日清戰爭中暴漢のため破壊されてしまったといふ。^(一〇〇)

九、大都に入るの説

中里氏の研究はいよいよ歩をすゝめて「燕京の卷」に入る。同氏によれば、日持が仁宗の宮廷で妙法を流布したことが史籍に見えないのは「宮中のみに行われ、宮門外に出なかつた」ため、普通の史乘にその記録は求め得られないから、宮中の祕録をさがす外はないというのである。そして仁宗の側近の曹哥の手になる宮廷の祕録「宮記」なるものを

見たと語っている。これは寫本のまゝ宮中の文庫にあったのを、順帝のとき明軍に攻められ、大都燕京をひきはらったとき上都開平府に持ち去った。しかしやがて上都も明軍の手におち、寶物、文書をあげて押收された。くしくも清朝の光緒三年（明治十年）この文書はドロソールの民家から発見され、北京の好事家のもとに買とられ、轉々して山西の太原府にうつされた。この間に原寫本は失われ、その複寫のみが残った。「原本はしかし、清室の文庫に收めたと確聞するから、十分さがせば必ず発見しうると信ずる。私の見たのは複寫の『宮記』である」と記している。⁽¹⁰⁾元朝歴代の實録もすでに滅んでしまつたが、この「宮記」という實録以上の祕録が、もし假に現存したとしたら、元朝史の研究はかなり面目をかえる點があるが、そのようなものゝ存在は知られていない。日本人でそれを見たのは中里氏一人という事にならう。もし同氏がそれを見たことが事實なら、正しく好事家か詐欺師の手になつた偽書であつたらう。私は日持上人の事蹟を考える必要上から、やむを得ず中里氏の記録を駁しているけれども、もともとこのようなことを樂しとしてゐるわけではない。かゝる怪しげな文献をあげてまで、上人のかの地における活動を誇張しようとしたのは果して何故であつたらうか。中里氏もすでに幽明境を異にしたことであり、故人を責めたてるのも甚だ心外のことであるが、同氏がこの傳記を撰した心境を解しかねている。また、かゝる小説的想像をあくまでも史實の如くとりつくり示されたことを同氏のために悲しむが、それよりもなを高僧日持のために痛まざるを得ない。その事蹟について、ある事、ない事を分別せず、ただ徒らに誇張して後世に伝えるということは決してその人を尊敬する途ではない。その盛名や偉業をかりて傳記者が私心をたくましくしている證據である。日持上人の大陸渡航の動機が全く人間の煩惱のうち克ち不惜身命を旨としたものだったと考えられるが故に、あらん限りの學識を利用してこの一篇の虚構を盛りあげた人物に對して怒

りを押えることが私には出来なくなった。出来るならば、この邊で中里氏の説を批判することは切りあげて、卷をなげうちたいところであるが、中々、用意周到な箇所もあるその所説を一通り紹介しないと、私自身の信ずる所を述べる事が出来ないのではなおしばらく続けたいと思う。

「仁宗の招きを受けた龍興寺の光覺と日持は燕京に入り、一先ず西山の鹿苑寺に入った後、宮中に赴いて帝に謁し、また西山に歸った。間もなく光覺は眞定にもどり、日持は帝の決意を探るため、西山から帝の近臣曹哥の手を経て『奉仁宗帝封事』の一文を上った」とある。^(一〇二)もちろん「仁宗」とは崩後の廟號であるから、日持自身が上奏文にそのような題をつけるはずはない。

『宮記』は漢文と蒙古文の二文字から成っていて、上人の密奏は蒙古文字で書いてある。これは他日妙法流布に際し一般蒙古人に知らしめる便利上、ことさら蒙文としたのであろう。現に曹哥は奏文に附言し、

原文ハ玉ノ如シ譯文ハ砂ノ如シ、唯々世ノ理解シ易キヲ便トス

とあるにても推知すべしである。^(一〇三)曹哥のいう原文とは何であろうか。日持が最初から蒙古文でしるし、譯文とはその漢文譯のことなのか、それとも日持はまず漢文で書き、これを蒙古文に譯したのか、意味がはっきりしない。次に中里氏は「日持上人の仁宗帝に奉る奏文」なるものをあげ「原文、元時代の蒙古文」とし本莊可宗、中里右吉郎共譯としてある。その文章はきわめて短いもので要するに「日持の志を憐み妙法を宣揚し一天四海を安泰せしめよ」というにあつて、格別、日蓮の教説をくわしく説いたものではない。しかし「仁宗はこの奏文を見て、大に感歎し、朕斷じて行」と仰せられた」とある。この斷行とは「喇嘛淫佛を一掃し大乘妙法を弘むることである」と中里氏は附記している。

「これから日持は宮中に入り、毎日一回法華經を帝に講ずることとなった。宮中に勢力を持っていた皇太后をはじめ、皇后やラマ僧もこれを聴聞して感歎し、皇太后の如き、上人による授戒の式まであげようとした。時に右丞相鐵木迭兒が皇太后の寵をたのんで専横であった。帝はこれを除かんとしたが果さず、ただその實權を奪って太子太師としたので鐵木迭兒は不平を抱き、楊班禪というラマ僧と共謀して日持を大罪に陥れて斬首するか、國外に放逐しなければならぬ。『法華妙法が繁昌すればラマ教は滅びよう。皇太后が受戒するようのがあれば、正法は興り、仁宗の改革も行われ、鐵木迭兒一黨は宮中から驅逐されるであろう』という楊班禪の議を入れ、ついに日持暗殺の陰謀が進められた。そこで鐵木迭兒は帝に『日持は妙法の行者と稱するが、實は日本が世祖に攻められた復讐のために、大元に派遣した間諜である。早く誅戮せよ』とすゝめたが、帝は笑ってとりあげない。日持もまた危険の日に身にせまるを知らぬが如くであった。のみならず、當時燕京に教會を建ててクリスト教を説いていたモンコルヴィ一派（モンテ・コルヴィノのヨハネのことと思われる）の宣教師團に對し『彼れ未だ大乘妙法の眞佛を知らず。われ法の爲、對決すべし』といふ、帝に請い、單身宮中を出て教會に赴こうとしたが、帝のため阻止された。」

モンテ・コルヴィノのヨハネ *John of Monte Corvino* の事蹟については、こゝに再説を要しないであろうが、一二四七年に、イタリアで生れたというから、^(一〇五)日持より三歳ほど年長である。フランススコ派の僧としてローマ法王廳から東洋に派遣され、一二九一年（至元二十八年）ころイール汗國の都タブリーズを出發し、インド經由、海路を大都に向つた。ローマ法王ニコラス四世からあたえられた東方布教の大任を果すためであった。大都到着の年月ははっきりしないが、アンリ・コルディエーは一二九二年末か九三年ごろとしている。^(一〇五)ヨハネの努力により大都にクリストの福音

をひろめる基礎がすえられたので、法王は一三〇七年に更に七名のフランススコ派の司教を送り出して、ヨハネを大司教とするカンバレック Cambalec (khān-balig 帝都の義) の大司教區が成立した。仁宗の兄武宗の如きは、母后とともヨハネから洗禮を受けたという風説が立ったほどである。^(二〇六)一三二一年には、法王クレメント五世は、更に三人の司教を大都に送ってヨハネを助けさせた。かれが八十餘歳で任地で歿したのは一三二八年ころといわれているから、^(二〇七)なるほど仁宗治下の大都では盛に活動していたのである。この邊のことは時代的には破綻を示していない。大司教モンテ・コルヴィノのヨハネと日持上人とがもう少しで法論を戦わすところだったとは奇抜な着想であるが、仁宗にとめられてしまったというのであるからこれまた何ともいふ餘地がない。

中里氏は更に曰く、元曲「大成殿」中に日持上人暗殺に關することが出ていて、戯曲とはいへ當時の經緯を基礎として書いたものであるから、大に参考となるであろうと。そのような作があるかどうか、まだ探し出せないでいる。

「仁宗はその後ますます上人を尊敬したけれども、ラマの奸黨の形勢はいよいよ不穩なので、西山に退隱をすゝめた。よって鹿苑寺に退き、自由の境遇となつて、盛に法華妙法を説いて一般の信者を教化した。有名な翰林學士程鉅夫も上人の説法をきき、妙法の信徒となつた。^(二〇八)帝もまたしばしば西山に幸して上人を訪れた。このころ上人は入蒙の志をおこした。蒙古より西域に進み日蓮の理想を實現せしめたいと望んだからであった。曹哥を通じて帝の許しを得、上都に赴いて入蒙の準備をととのえた」とある。^(二〇九)上都はすでに蒙疆のうちにあるが、こゝではじめて中里氏による日持の行程は、その遺物の出た宣化と交錯する。大都から上都開平府に赴いたものとすれば、恐らく居庸關から宣化を通り、長城を越えて北上したと思われるからである。

中里氏の書はこれより入蒙（和林）の巻に入るが、その紹介や批判は後文に譲ることとする。（未完）

註

（五九） 陳增敏「宣化盆地」（民國二十七年長沙）頁一二七—一二八。顧祖禹「讀史方輿紀要」卷十八。

（六〇） 「宣化盆地」頁三〇。（六一） 同上、頁一〇八—一〇九。（六二） 同上、頁二八。（六三） 同上、頁一〇九。

（六四） 同右、頁四一。（六五） 同上、頁六〇。

（六六） 菊池秋雄「北支果樹園藝」（昭和十九・養賢堂）頁二〇六。

（六七） Marco Polo, *La description du monde, avec introduction et notes par Louis Hambis, Paris 1955, p. 92.*

元代にこのあたりから銀をとつたことは明・嘉靖の宣府鎮志（卷一四）に雲州の聚陽山の銀をとつたことをしるし、また元史（卷五）にも中統三年八月のこととし「甲午博多歡等奏請するには宣德州・德興府等の處の銀冶を以つて其の匠戸に付し、銀及び石綠・丹粉を取りて官に輸せしめんと。之に従う」とある。

（六八） 元史列傳（卷一七一）劉因傳。

（六九） 佛祖統記には長瑞府につくる。

（七〇） 佛祖統記には「府の東西十有五里」としている。

（七一） 佛祖統記には慶山縣につくる。

（七二） 佛祖統記には珍原縣につくる。

（七三） 佛祖統記には長興府につくる。

（七四） 佛祖統記には法華庵につくる。

（七五） 佛祖統記には濟州につくる。

（七六） 中里右吉郎「蓮華阿闍梨日持上人大陸踏破事蹟」（大正十五年、靜岡市蓮永寺刊）頁六。

（七七） 松前郡史（昭和卅一年、松前町教育委員會、福島町教育委員會發行）その他の著があり、すこぶる穩當な史眼を示している。

日持上人の大陸渡航について（中）（前嶋信次）

- (七八) 高鍋日統「聖雄日持と豊太閤」(昭和十七年、厚和舊城大南街、非賣品、静岡市蓮永寺藏) 頁三、ただし柿花氏が果してそういう結論であつたかについてはやや疑問がある。
- (七九) 同書、頁一四八(北海道渡島の石崎妙應寺所藏)。
- (八〇) 渡邊茂「北海道傳説集」和人篇、頁七〇―七一、妙應寺由來。(八一) 同上書、頁七一―七二。
- (八二) 同右書、頁三九―四〇「夜鳴石」の項。刻文は「後五百歳中廣流布、大日大王、南無妙法蓮華經、大月大王」の二十三字だとのことであるが、かなり磨滅している。(八三) 同上書、頁四三。
- (八四) 甲州笛吹川における日蓮の傳説は謠曲「鵜飼」のうちでもあつかわれている。また「日蓮上人一代圖會」(大正十一年、日本歴史圖會本) 頁四八四―四八八。
- (八五) 松本隆「松前郡史」によれば江差の法華寺の起源は室町時代末期に兩羽地方で宗旨の傳播に努めた京都本満寺の日尋上人が上の國小堀で日持の一石一字の經文を發見し、そこに營んだ法華堂を基とし、大永元年(一五二一)にさかのぼるといふ。慶長年間以前のいづところか、寺基を松前に移したともある。(同書二七頁) しかし現在は江差にも松前にもひとしく日持を開基とする同名の寺がある。昭和三十一年八月、筆者はこの二刹を訪れたが、これという記録や遺品はなかつた。
- (八五) 影山堯雄「日持上人傳」(昭和二十六年刊)。
- (八六) 高鍋日統「聖雄日持と豊太閤」頁一三一―一五。
- (八七) これも高鍋師の右掲書に載せてある。
- (八八) 同書頁九七―一〇〇。
- (八九) 中里右吉郎「日持上人大陸踏破事蹟」頁一四―一五。
- (九〇) 同右書、頁一五。
- (九一) 同右、頁一六。
- (九二) 同右、同頁。
- (九三) 同右頁一七。

- (九四) 同右、頁一七一—三〇。
 (九五) 同右、頁二〇。
 (九六) 同右、頁二〇—二一。
 (九七) 同右、頁二二。
 (九八) 同右、頁二二—二四。
 (九九) 同右、頁二三。
 (一〇〇) 同右、頁二四。
 (一〇一) 同右、頁二五—二六。
 (一〇二) 同右、頁三一。
 (一〇三) 同右、頁三一—三二。
 (一〇四) H. Yule & Cordier, *Cathay and the way thither*, Vol. III. London 1914, p. 3.
 (一〇五) *Ibid.*, p. 5. Note. 1. ユールは一二九四年以後と考えている。(Ibid., p. 5).
 (一〇六) *Ibid.*, p. 10.
 (一〇七) *Ibid.*, p. 11.
 (一〇八) 程鉅夫は仁宗の皇慶二年三月に病を以つて辭任を願出て、郷里(建昌)にかえり、居ること五年で七十歳で卒したという(元史卷一七二)。故に仁宗の治世のほんの初期だけしか大都にはいなかったらしいから、この話は少し變である。
 (一〇九) 中里氏前掲書、頁四二。
- 本稿は昭和三十一年度文部省科學研究費(各個研究)による研究の一部である。